

2010 年度 KUIS-CLS

コロキアム・ワークショップ等報告

神田外語大学言語科学研究センター(KUIS-CLS)主催の言語学講演会&研究会(1回)、理論言語学ワークショップ(1回)、言語学講演会・ワークショップシリーズ(1回)が以下のような日程、内容で開催されました。

<言語学関連>

- (1) 神田外語大学 CLS10 周年 言語学講演会 & 研究会
70 年代「日本語の生成文法研究」再認識
—久野暲先生と井上和子先生を囲んで—

日時：2010 年 7 月 1 日（木）10：50～18：30

2010 年 7 月 2 日（金）10：55～18：30

会場：神田外語大学 3 号館 2 階、2 号館 2 階・3 階

講演 1：(7 月 1 日)

井上 和子 先生（神田外語大学名誉教授）

日本語のモーダルについて

講演 2：(7 月 2 日)

久野 暲 先生（ハーバード大学名誉教授）

二重主語構文と尊敬形マーキング・否定極性表現
ライセンスニング

研究会：

7 月 1 日（木）

- ・長谷川 信子 氏（神田外語大学）

開会あいさつ&ワークショップの趣旨説明

- ・長谷川 信子 氏（神田外語大学）

日本語の主語：ガ格と人称提示文

- ・藤巻 一真 氏（東京国際大学／神田外語大学 CLS）

副詞と焦点解釈

- ・高橋 清子 氏（神田外語大学）
タイ語の関係節の分類について
- ・富岡 諭 氏（デラウェア大学）
従属文内の主題、賓述（Predication）、および判断理論
- ・中村 浩一郎 氏（広島女学院大学）
Contrastive topic-marker としての「は」とスクランブル
リングとトピック・フォーカス投射
- ・上原 由美子 氏（神田外語大学）
恩恵性のない事象における「ていただく」について
—「～に V してもらおう」構文の機能的分析から—
- ・ヨフコバ四位 エレオノラ 氏（神田外語大学）
学習過程から理論研究へ、また理論研究から日本語教
育へ—久野先生の「視点」と「新しいインフォメイ
ション」という概念を中心に—
- ・岩本 遠億 氏（神田外語大学）
アスペクト解釈と相強制—井上和子『変形文法と日本
語』の現代的意義—

7月2日（金）

- ・栞原 和生 氏（神田外語大学）
補文標識と Wh 句の共起関係について：理由を表す
Wh 付加詞を中心に
- ・北川 善久 氏（インディアナ大学）
顕在統語を再考する
- ・漆原 朗子 氏（北九州市立大学）
助動詞「まい」の形態統語的分析
- ・上田 由紀子 氏（秋田大学）
主語名詞句の統語的位置：モダリティと否定のスコー
プから
- ・綿貫 啓子 氏（シャープ株式会社／神田外語大学 CLS）
日本語後置文から考察する談話の文法

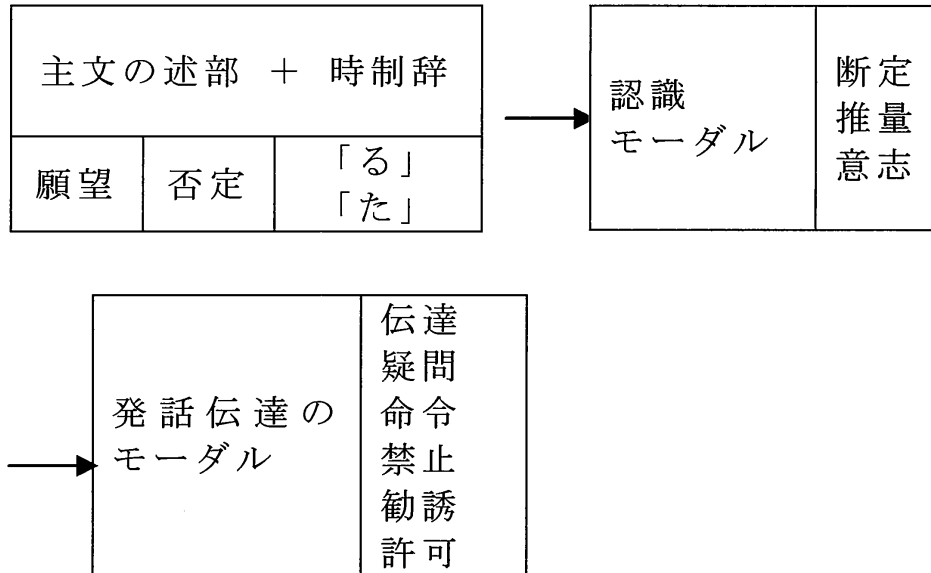
- ・松尾 章 氏（神田外語大学博士前期課程）
テ節とナイデ節についての考察—付帯状況と継起の用法を中心に—
- ・大倉 直子 氏（明治学院大学／神田外語大学 CLS）
日本語の Applicative—テアゲル構文の分析—
- ・宮川 繁 氏（MIT）
脱亜論と日本語文法

講演要旨

講演 1：井上 和子 先生（神田外語大学名誉教授）

演題：日本語のモーダルについて

モーダルを「認識(epistemic)」のモーダルと「発話伝達(speech act)」のモーダルに分ける。その内容を以下に示すが、これは井上(2007)に示したものと同一である。



本発表では、これらのモーダルを CP (Complementizer Phrase) 内に位置づけ、CP に属する他の機能範疇との構造上の位置関係を元に、談話に基づくモーダルの意味について考察する。

講演 2 : 久野 暉 先生 (ハーバード大学名誉教授)

演題 : 二重主語構文と尊敬形マーキング・否定極性表現ライセンシング

二重主語構文は、動詞尊敬形マーキングと否定極性表現ライセンシングに関して、一見矛盾した特性を示す。動詞尊敬形マーキングは **clause-bound** であるから、(1b) の不適格性は、二重主語構文が (1c) に示すような複文構造を持っていることを示唆する。

- (1) a. 太郎がお父さんがお亡くなりになってしまった。
b. *山田先生が犬がお亡くなりになってしまった。
(柴谷 1977)
c. [山田先生が [犬が死んだ]]

他方、否定極性表現も **clause-bound** であるのに、(2b) が適格文である、という事実は、(2b) の「太郎しか」と「いない」とが同一節の構成要素である、すなわち二重主語構文は単文構造をもっている、ということを示唆する。

- (2) a. 太郎が子供が一人しかいない (こと)
b. 太郎しか子供がいない

本ペーパーは、この矛盾を解決する一案を提出する。

研究発表要旨

- ・長谷川 信子 氏 (神田外語大学)

演題 : 日本語の主語 : ガ格と人称提示文

日本語のガ格主語は「総記」もしくは「中立叙述」と解釈されることは、Kuno (1973)、久野(1973)の明確な記述を受け、広く受け入れられている。そこでは、「総記」ではないガ格主語が、中立叙述のガ格とされている。本発表では、中立叙述のうち、主文に生起す

る主語においては、ガ格主語の「もっとも基本的な文」と考えられてきた「太郎ガ来た」「雨ガ降っている」といった文は、人称制限を持ち、特殊な時制解釈を要求することなどから、英語の「場所句倒置文(Locative Inversion)」「提示の There 構文」などと共通点があることを指摘し、文の機能と構造の観点から、「基本的な文」ではなく、英語と同様の文表示 (CP 領域) を持つ「提示文」であることを主張する (長谷川(2008)、神谷(2009)参照)。主文のガ格については、Kuno (1973) だけでなく、Kuroda (1965, 1990) の *thetic judgment*、井上(2009)の現象文、仁田(1991)の現象描写文といった観点にも言及したい。

・藤巻 一真 氏 (東京国際大学 / 神田外語大学 CLS)

演題：副詞と焦点解釈

本発表では副詞のかき混ぜに関係する二つの現象を考察する。一つ目は、久野 1973 他で言われるガ格主語の総記の解釈が、低い位置の副詞 (様態副詞) の文頭へのかき混ぜによって無くなる現象を取り上げ、副詞のかき混ぜ自身が焦点解釈を得る為の移動であることが原因ではないかと論じる。これに関連して二つ目に、高い位置の副詞 (陳述の副詞) の焦点となる要素 (例えば「うれしいことに」がその焦点とするうれしい要素) が、かき混ぜによって変わる例を取り上げ、かき混ぜと副詞自身が取る焦点の関係を探る。

・高橋 清子 氏 (神田外語大学)

演題：タイ語の関係節の分類について

タイ語の関係節 (連体修飾節) や関係節化辞に関する論考は数多い。タイ語の関係節の分類を提示している論考も少なくないが、他言語の関係節の分析において用いられてきた分析概念—例えば、①「定」対「不

定」名詞句修飾、②「限定」対「非限定」関係節、③「主要部外在」対「主要部内在」関係節、④「主要部指示形式不在」対「主要部指示代名詞内在」関係節、⑤「名詞句接近度階層」など一に頼る論考が多い中で、Kuno & Wongkhamthong 1981 は⑥「個人的」対「一般的」特徴付けという独自の分析概念を導入した。本発表では、⑥「個人的特徴付け」という概念を⑦「特定性、特筆性」と定義し直し、さらに①、②、⑥「一般的特徴付け」といった概念を⑧「主名詞句の同定性」、⑨「関係節の現実性、叙述性」、⑩「主節への統合度、名詞化度」といったより基本的な概念に置き換えることによって、タイ語の主要な3種類の関係節構文の違いを明示的に説明する。

・富岡 諭 氏 (デラウェア大学)

演題：従属文内の主題、賓述 (Predication)、および判断理論

主題の「は」が関係節内に出てきにくいことはよく知られているが、その制約に関しては従属文内の主題の制約の延長と考えるのが一般的である。今回の発表では、関係節内の「は」の制約は一般的な従属文内の制約では説明できないことを指摘し、その解決には Kuroda (1992)で主張された判断理論に基づいた賓述 (Predication)に対する制約が必要であることを主張する。

・中村 浩一郎 氏 (広島女学院大学)

演題：Contrastive topic-marker としての「は」とスクランプリングとトピック・フォーカス投射

Kuno (1973)は、「は」は文の主題を示し、“speaking of John”のような意味を持つ、「ジョンは学生です」のような用法がある。また、「は」は対比の意味を持つ、

「雨は降っていますが、、、」のような用法もある、と説明している。本発表では、Kuno (1973)を出発点として、「は」の持つ機能を考察する。主な主張は、(1)「は」の持つ機能は構造位置によって決定される(2)E. Kiss (1998)などで主張されているように、トピック句はフォーカス句とは異なり、スコープをとらない、(3)対比の解釈は、フォーカスではなくトピックである、の3点である。

- (1) a. 太郎はフランス語は話せる (がドイツ語は話せない)。
b. ?フランス語は太郎は話せる (がドイツ語は話せない)。
c. フランス語は太郎は話せる (が花子は話せない)。

(1a) では、「太郎は」は主題を、「フランス語は」は対比を示す。それに対し、対比の句「フランス語は」を前置した(1b)はやや不自然な文である。また、(1c)では「太郎は」は対比の解釈を持つ。このように、「は」のもつ解釈は構造上決定されること、そのような解釈はトピック句、フォーカス句を想定することで正しく表示される、ということを示す。

・上原 由美子 氏 (神田外語大学)

演題：恩恵性のない事象における「ていただく」について—「～に V してもらおう」構文の機能的分析から—

「てもらおう」は、通常、話し手が恩恵を感じる事象に用いられるが、「このボタンを押していただくと水が出ます」のように、事象自体(「ボタンを押す」)には恩恵が感じられなくても「てもらおう」の敬語の形式である「ていただく」が使われる場合があり、特にビ

ビジネスや商業的な場面において多用されている。「てもらう」と「てくれる」（および「ていただく」と「てくださる」）は置き換え可能な場合があるが、この種の「ていただく」は「てくださる」に置き換えにくい。高見・久野（2002）では、「てもらう」は、「てくれる」と異なり、事象による利益が「ニ」格名詞句の指示物のおかげであると考えていることを示すこと、および「てもらう」「てくれる」構文の適格性が4つの語用論的要因の相互作用によって説明されることが示されている。本発表では、この知見に基づき、「ていただく」には話者による「ニ」格名詞句の指示物への意識が必須であること、および「ていただく」構文が事象自体に恩恵性がなくても適格になるしくみを示す。

・ ヨフコバ四位 エレオノラ 氏（神田外語大学）

演題：学習過程から理論研究へ、また理論研究から日本語教育へ—久野先生の「視点」と「新しいインフォメーション」という概念を中心に—
日本語学習者にとっては、習得が極めて難しい形式があります。例えば、授受動詞や指示詞、また助詞「は」・「が」など。自らもかつて、日本語学習者として、特殊性のあるこれらの形式の意味・用法をめぐる様々な疑問を抱いたことがあります。学習プロセスの中で生まれたこれらの形式に関する疑問から研究への関心が生まれました。そこで出会ったのは「久野文法」でした。久野先生が提示している概念や現象の捉え方が、学習プロセスの中で解明できなかった疑問の答えを与えてくれ、また、研究をさらに進めていくきっかけとなりました。そして、研究を通じて得た成果は、今度は、日本語教育のプロセスの手助けとなっています。

本発表では、主に「授受表現」と助詞「が」に焦点を当て、「久野文法」から受けた影響についてお話をさせていただきたいと思います。

・岩本 遠億 氏（神田外語大学）

演題：アスペクト解釈と相強制—井上和子『変形文法と日本語』の現代的意義—

文の意味解釈は、どの程度一般的原則によって行われるものであるのか。一般的原則が当てはまらないものについては、どのような個別的解釈規則が必要となるのか。井上和子が『変形文法と日本語・下』で取り組んだテイル形の意味分析は、この問題に取り組んだものである。その中には、現在のアスペクト論では「相強制」とされる概念操作の先駆けとなるような洞察が示されている。本発表では、井上が提示した原則と個別的解釈規則を現在のアスペクト論の観点から再検討してその意義を明らかにし、「相強制」の理論的意義について議論する。近年のアスペクト研究においても相強制の存在が見落とされているものも散見されるが、これを仮定しなければ説明のつかないのがアスペクト現象であり、それを理論の中に取り込むことによってその全体的な枠組みが大きく変わるのである。

・栗原 和生 氏（神田外語大学）

演題：補文標識と Wh 句の共起関係について：理由を表す Wh 付加詞を中心に

日本語生成文法の標準的な分析では、疑問文の節末に現れる「か」・「の」は、いずれも疑問を表す補文標識とされる。この発表では、「の」は補文標識の一種ではあるものの、「か」とは異なり、「発話内の力」の指定には関与しないとする仮説を提示し、その観点から理由を表す wh 付加詞「なぜ・何を」と補文標識「の」

の共起関係について考察する。「の」は、それ自体、疑問化辞ではないのだが、「なぜ」は、他の wh 句とは異なり、(少なくとも主節では)「の」と共起しなければならない、という一見すると矛盾した特徴を示す。このような問題について、Rizzi (1997, 2001)で示されている精緻化された CP 構造の観点から考察する。

・北川 善久 氏 (インディアナ大学)

演題：顕在統語を再考する

まず、日本語におけるいくつかの異なる現象に見られる「プロソディーと情報構造の対応性」を文法、特に極小理論の枠組みの中で捉える方法を探る。次に、その作業の過程で得られた所見・視野をもとに顕在統語のあるべき姿を再考し、日本語の分析から、更には言語類型学的な考察へとつなげる。

・漆原 朗子 氏 (北九州市立大学)

演題：助動詞「まい」の形態統語的分析

助動詞「まい」および関連する現代語および古典語の法要素の振舞いの観察に基づき、異なる機能範疇の主要部と、種々の副詞的要素が現れる指定部の統語地図を反映した構造を仮定すれば、それらの振舞いが統一的に説明できることを議論する。また、否定文は対応する肯定文あるいは動詞句を前提として持つという意味論/語用論的見解を援用すれば、主格および主題を表す助詞の分布が説明できることを示す。歴史的および地域的変異についての観察にも言及する。

・上田 由紀子 氏 (秋田大学)

演題：主語名詞句の統語的位置：モダリティと否定の
スコープから

本研究では、日本語の主語名詞句の統語的位置は一

つではないこと、また、時制辞句の主要部 T によって認可を受ける英語の主語名詞句とは異なり、補文標識句の主要部 C (CP 領域内の主要部) によって認可されることを時制辞よりも右にあらわれる真正モダリティ形式と主語の人称制限、および、否定のスコープ関係から示す。また、Kuno (1973)の提案した主題、対比の「は」、および、排他、中立叙述の「が」のそれぞれの意味機能を伴った主語名詞句の統語的位置についても言及する。

- ・ 綿貫 啓子 氏 (シャープ株式会社 / 神田外語大学 CLS)

演題：日本語後置文から考察する談話の文法

本論では、後置文の機能と構造を情報構造の観点から再考する。まず、後置文が、対話という聞き手とのインタラクションの場において漸進的 (incremental) に生成されるものであり、話者と聞き手の間に形成されるコンテキストの中で、話者が、自分が発する情報が聞き手にとって解釈可能か否かの判断を瞬時に行いながら、“言いたい・聞きたい” (話し手指向) と “聞き手に伝える” (聞き手指向) という二つの機能を両立させた結果であることを主張する。さらに、このように情報構造と密接につながっている後置文には、命題としての文とは異なる構造を想定すべきことを主張し、CP 領域内に位置する「話し手」と「聞き手」と関わる機能範疇 (それぞれ、便宜的、直感的に SP(SpeakerPhrase)、HP(HearerPhrase)とする) が関わることを論じる。

- ・ 松尾 章 氏 (神田外語大学博士前期課程)

演題：テ節とナイデ節についての考察—付帯状況と継起の用法を中心に—

久野 (1973) によって取り上げられているテ節の考

察は、日本語教育の現場を預かる者にとっても未だにその新鮮さを失わない論考である。本発表では、従属節の意味と統語の対応関係に着目して、付帯状況と継起の意味をあらわすテ節とナイデ節を中心に考察する。分析においては、従属節を階層との関係で考察した南（1964, 1974）、野田（1989）といった日本語学の先達の方法論に依拠しつつ、先行研究では特に言及されていない従属節主要部のアスペクト的特徴にも言及する。また、考察を通して、従属節内部の階層に関して、野田の階層モデルにおける、アスペクト階層のより詳細な洗練を示唆する。

・大倉 直子 氏（明治学院大学／神田外語大学 CLS）

演題：日本語の *Applicative*—テアゲル構文の分析—

「私は太郎に本を読んであげた。」のような、V-テアゲル（・ヤル）構文は、Kuno (1973)、井上 (1976) 以来、広く取り上げられ研究されてきた。この構文には、さまざまな興味深い特徴がみられ、それに関連して、以下のような問題が提起される。

- (i) 独立した語彙動詞としても使われる「アゲル」が、この構文では他の動詞を伴って現れる。この場合の「アゲル」は、どういう統語範疇に属し、どういう構造を形成しているか。
- (ii) この構文では、受益者項が現れるが、それは V の項か、「アゲル」の項か。また、この受益者項は、多くの場合は与格（二格）で現れるが、他の格で現れる場合もある。これは、どのように説明されるか。

本発表では、これらの問いに対して、*Applicative* (適用態) (Pykkänen 2002) という、追加項を VP に導入する

機能動詞の存在を仮定し、アゲルはその **Applicative** 主要部の具現であり、受益者項を（併合あるいは移動によって）導入することを議論する。また、このように **Applicative** によって導入された受益者項が、語彙動詞によって導入された項とは異なり、構造的に高い位置にあること、また、統語範疇が **PP** ではなく **DP** であることを示す。最後に、移動や授与を表す語彙動詞としての「アゲル」と、機能動詞として働く「(テ) アゲル」の共通点や違いに触れ、文法化という現象について考察したい。

・宮川 繁 氏 (MIT)

演題：脱亜論と日本語文法

1970年代から、井上先生、久野先生（また、黒田先生、柴谷先生）などが中心となり、生成文法の枠組みの中で、日本語の分析が盛んに行われるようになった。現在では、日本語の研究は、英語について、ロマンス語研究とほぼ同等の数の論文が発表されているであろう。しかしながら、生成文法は、1950年代に英語の分析を中心とした理論として生まれ、現在でも、英語、またインド・ヨーロッパ語の研究からの影響が強く見られる。本来、普遍文法の理論であるはずであるが、この西洋の言語に偏った状況は、現在の理論がまだまだ未熟であるということを示しているのではないだろうか。井上先生、久野先生の研究の特徴の一つは、そのような西洋の影響を乗り越えて、日本語の自然さを理論的に捉えようとしているところである。西洋の枠組みで日本語を研究することは、江戸・明治時代にも見られる。たとえば、蘭学者は、優れた、オランダ語の文法に基づいて、日本語の品詞、格などを分析している。日本語を西洋語のように分析することは、福

澤論吉の「脱亜論」の考え方に沿った一つの傾向でもあろう。蘭学者の研究は、橋本進吉などの研究を通じて、日本の学校文法のもとにもなっている。以上の状況を踏まえて、本発表では、明治時代に西洋から入って来た「主語」の概念と日本語の文法について考えてみたい。

(2) 理論言語学ワークショップ

The Workshop on “the Interface between Syntax and Pragmatics/Semantics” with Lectures by Paul Portner

日時：2010年9月11日（土） 9：50～16：45

2010年9月12日（日） 9：50～16：30

会場：神田外語学院3号館7階 プラザ・アズール

共催：グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育
研究拠点」（慶應義塾大学）

プログラム：

9月11日（土）

- ・ Nobuko Hasegawa（長谷川 信子）（神田外語大学）

Opening

The Role of ‘the Speaker’ in Syntax

- ・ Shoichi Takahashi（高橋 将一）（日本大学）

On the Nature of Clausal Complements and the Theory of
Movement

- ・ Yukio Furukawa（古川 幸夫）（神田外語大学）

Negation over *Because*?

- ・ [Lecture 1] Paul Portner (Georgetown University)

Free Choice with Imperatives and Modals

- ・ David Y. Oshima（名古屋大学）

Semantics and Pragmatics of Japanese Infinitive/Gerund
Clauses: Buttressing or Ambiguity?

- Noriko Kawasaki (川崎 典子) (東京女子大学)
When a Root Meets a Functional Head - Conflation and
Complementation
- 9 年 12 日 (日)
- Christopher Tancredi (慶應義塾大学)
Opening
Context Incrementation and Discourse Anaphora
- Kimiko Nakanishi (中西 公子) (お茶の水女子大学)
A Compositional Analysis of Free Choice *-Demo* in
Japanese
- Taisuke Nishigauchi (西垣内 泰介) (神戸松蔭女子学院大学)
Short vs. Not-so-short Answers to *Wh*-Questions
- Jun Abe (阿部 潤) (東北学院大学)
Discourse/Inter-Sentential Anaphora of Null Arguments in
Japanese: To Be Pro or Not To Be
- [Lecture 2] Paul Portner (Georgetown University)
The Gradability of Modals

講演の要旨

[Lecture 1] Paul Portner (Georgetown University)

“Free Choice with Imperatives and Modals”

The examples in (1)-(2) show free choice readings. For example, (1)a implies that it might be John and it might be Mary.

- (1) a That must be John or Mary.
- (1) b You may take an apple or an orange.
- (2) Have an apple or an orange!

Most accounts of free choice phenomena have focused on the role of the modal operator in examples like (1)

(Zimmermana 2000, Aloni and van Rooij 2004, Schultz 2005, Simons 2005, Alonso-Ovalle 2006, van Rooij 2008, among others). In order to cover (2) as well, they must assume the presence of a covert modal in imperatives. However, not all modal sentences show choice effects (Portner 2010):

(3) At the top of the mountain, you can find snow or ice to make drinking water.

Example (3) does not imply that you can find snow and you can find ice. I will argue that choice phenomena are due to a certain type of performative or dynamic meaning; such meaning is characteristic of imperatives, and can be identified in modal sentences which show choice phenomena as well.

[Lecture 2] Paul Portner (Georgetown University)

“The Gradability of Modals”

Modal elements, most obviously modal adjectives but also members of other categories, display gradability:

- (1) a It's very likely that John will win.
- (1) b It's more likely that John will win than that Mary will.
- (1) c There's an 80% chance that it will rain today.

Gradable expressions are frequently analyzed in terms of degrees in a scale, and patterns of modification can be used to determine the properties of scales (Kennedy and McNally 2005). For example (2) indicates that the scale associated with *tall* is open (has no maximal member), a fact which

accords with intuition:

(2) *Mary is entirely tall.

As discussed by Portner (2009) and Lassiter (2010), we can use similar tests to determine the properties of modal scales. Portner points out that *probable* also appears to have an open scale:

(3) *It is entirely probable that it will rain.

However, the intuitive scale for *probable* is closed, since it has a maximum (certainty). I will discuss this and other related puzzles, and consider the feasibility of a solution which incorporates probability theory into the semantics, as proposed by Yalcin (2007, 2010) and Lassiter (2010).

各発表の要旨

・ Nobuko Hasegawa (長谷川 信子) (神田外語大学)

演題 : The Role of ‘the Speaker’ in Syntax

The main stream of syntactic theory has long been concerned mainly with the structure of propositions, abstracting away from whether particular person features play any role in sentence construction. In traditional Japanese studies as well as in the work of Kuroda (1965, 1972, 1992) and Kuno (1973, 1978), however, it has been noted that Japanese is abundant with ‘the speaker’ (and ‘the hearer’, to some extent) oriented phenomena. Recently, I have taken up some of such phenomena (as well as some ‘anti-speaker’ phenomena) and argued that ‘the speaker’ plays a much more active role not only in discourse/pragmatics but also in syntax and there is a functional feature specifically related to ‘the speaker’ in

the C system (Hasegawa 2007, 2008, 2009, in press). The phenomena taken up include: (i) the 1st person deletion, which is to be differentiated from the Topic deletion; (ii) the propositive-*masyoo*/volitional-*(y)oo* sentence (in relation to imperatives); (iii) the *kure-ru* construction; (iv)thetic judgment as an anti-speaker phenomenon. In this presentation, I will subsume the basic intuition behind these phenomena/analyses under the [\pm Speaker] feature (or sub-head) in the C system of syntactic representation and consider how this feature is theoretically treated both in syntax and in pragmatics.

- Shoichi Takahashi (高橋 将一) (日本大学)

演題 : On the Nature of Clausal Complements and the Theory of Movement

Clausal complements show two seemingly independent syntactic properties. First, clausal complements are allowed to move only if their base-generated position is one in which DPs are allowed to appear. Secondly, clausal complements cannot appear in the canonical subject and object positions, in which DP complements can appear. I suggest that these two properties are indeed closely related. I propose that whenever a clausal complement undergoes movement, it must involve a DP structure where a covert definite determiner takes a CP complement. I claim that this structural requirement for moved clausal complements results from properties of the procedure for interpreting structures involving a movement dependency under the copy theory of movement. I also argue that the second property of clausal complements follows from the mechanism for

licensing this covert DP structure.

- Yukio Furukawa (古川 幸夫) (神田外語大学)

演題 : Negation over *Because*?

Several previous studies claim that *because*-clauses exhibit scope interaction with respect to negation. They assume that e.g. (1) has both the narrow and wide scope negations. Although I do not have any objection to (2) as the description for its narrow scope negation, I claim that neither of the descriptions in (3) that the previous studies assume as the descriptions for its ‘wide scope negation’ is problem free. (For example, (3a) has a compositionality problem, while (3b) is neither intuitively nor logically correct.) Alternatively, I propose that, in general, the wide scope negation over a *because*-clause is apparent: negation involved in the apparent reading is not truth functional but meta-linguistic, and this meta-linguistic aspect triggers the reading.

- (1) George doesn't starve his cat because he loves her.
- (2) It is because he loves her that George doesn't starve his cat. (BEC>NEG)
- (3) a. It is not because he loves her that George starves his cat.
b. It is not the case/true that George starves his cat because he loves her. (NEG>BEC)

- David Y. Oshima (名古屋大学)

演題 : Semantics and Pragmatics of Japanese Infinitive/Gerund Clauses: Buttrressing or Ambiguity?

It has been widely observed that Japanese dependent

clauses headed by an infinitive form (also called continuative form or *renyōkei*; e.g. *shi* for the verb *suru* ‘do’), a gerund form (*te*-form; e.g., *shite*), or negated versions thereof (e.g., *sezu(ni)*, *shinaide*, *shinakute*), may stand in various semantic relations with their superordinate clause. A recently published reference grammar (Nihongo Kijutsu Bunpō Kenkyūkai 2008) lists and describes eight functions associated with them: (i) conjunction, (ii) contrast, (iii) preliminary remark, (iv) succession, (v) cause, (vi) concession, (vii) condition, and (v) accompanying circumstance. This talk addresses the following issues, using corpus data as an aid.

- (1) What is (are) the core meaning(s) of infinitive/gerund forms? In other words, how much of their functional diversity should be attributed to form- or construction-specific meaning, and how much is pragmatically derived, through a process along the lines of conjunction buttressing (e.g., *John turned the switch and the motor started* +> ‘John’s turning the switch caused the motor to start’).
- (2) It has been noted that infinitive and gerund forms are sometimes interchangeable with each other (modulo stylistic effects), but not always. How exactly do they differ?
- (3) Both syntactically and semantically, the Japanese infinitive/gerund constructions have similarities with the English participial constructions (e.g., *John threw himself to the ground, dragging Pat with him*). In what respects do they contrast with each other?

- Noriko Kawasaki (川崎 典子) (東京女子大学)

演題 : When a Root Meets a Functional Head-Conflation
and Complementation

This paper examines how lexical roots are incorporated into syntactic structures so that they jointly determine the meaning of the verb phrase. I will first present analyses of the double object construction in English and the dative benefactive construction in Japanese, whereby they both involve the functional head v taking the projection of another functional head *HAVE*. This analysis explains why the indirect object in these constructions is construed as an intended recipient, rather than the actual recipient. I will then argue that the lexical root appears in the complement of *HAVE* in Japanese, while it is adjoined to the projection of v in English. This correctly predicts that verbs of change of state cannot appear in the double object construction in English, while they can in the dative benefactive construction in Japanese. Finally, it will be shown that the lexical verb is not merged with v , but with vP , and only later in the phonological component is it linked to the position of the head in English. This requires a mechanism other than syntactic movement which resolves an LF-PF mismatch. The mechanism is a possible instantiation of ‘conflation’ in Talmy’s (1985) sense, and is claimed to be responsible for the apparent idiosyncrasies of the range of lexical roots that may appear in the double object construction in English.

- Christopher Tancredi (慶應義塾大学)

演題 : Context Incrementation and Discourse Anaphora

In this talk I will examine two related discourse

phenomena – licensing of deaccenting and pronominal anaphora. I suggest that both phenomena are inherently discourse processes, in that each involves a dependence on something already present in the discourse context. Both I argue point to a need for a theory of discourse incrementation, a theory of how the information in a sentence gets systematically added to the context. I argue that both phenomena point in the same direction – that context incrementation is done piecemeal, phase by phase. I argue that it is this phase-by-phase nature of context incrementation that ultimately underlies Condition B effects and parallel effects observed with deaccenting.

- Kimiko Nakanishi (中西 公子) (お茶の水女子大学)

演題 : A Compositional Analysis of Free Choice *-Demo* in Japanese

Japanese focus particle *-demo* with an indeterminate pronoun is considered to parallel with English free choice *any* (e.g., *Dare-demo ko-rareru* ‘who-DEMO come-can’ = *Anyone can come*) (Nishigauchi 1990). In this talk, I propose a compositional analysis of *-demo* where *-mo* triggers a wide scope universal interpretation, while *-de* is an overt realization of an exclusiveness condition (Menéndez-Benito 2010). I examine whether the proposed compositional analysis can handle the following issues: 1) the relation to negative polarity items with *-mo*, 2) modal restrictions of *-demo*, and 3) various interpretations of *-demo* in imperatives.

Nishigauchi, T. 1990. *Quantification in the Theory of Grammar*. Dordrecht: Kluwer.

Menéndez-Benito, P. 2010. On universal free choice items.

- Taisuke Nishigauchi (西垣内 泰介) (神戸松蔭女子学院大学)

演題 : Short vs. Not-so-short Answers to *Wh*-Questions

The present paper discusses the nature of fragments in Japanese, in particular, fragment answers to *wh*-questions (*wh*-answers). We claim that *wh*-answers are derived by Delete in-situ on the pronunciation side -- the domain containing the answer constituent, which bears the focus feature, is deleted except the answer constituent. We consider this the same mechanism as the process reducing the pitch of the portion to the right of focus. The answer constituent is moved to SpecFP in covert syntax. Derivation of *wh*-answers thus is free from island effects. A *wh*-question with a *wh*-phrase inside a relative clause allows two types of answers: a short answer which fills in the value of the *wh*-phrase in the question, and a not-so-short answer in the form of the relative clause in the question modulo the *wh*-phrase is replaced by an answer constituent. The present analysis argues that the two types of answers arise from distinct derivations (from phonologically distinct sources), which argues against Nishigauchi (1986, 1990) in which the short answer is claimed to derive from the not-so-short answer by deletion.

- Jun Abe (阿部 潤) (東北学院大学)

演題 : Discourse/Inter-Sentential Anaphora of Null Arguments in Japanese: To Be Pro or Not To Be

In this talk, I argue for the position taken by Huang (1982, 1984) that “the so-called pro-drop phenomenon happens only in languages with sufficiently rich

inflection” and hence that null arguments observed in such languages as Chinese and Japanese should be analyzed in terms of a different mechanism. In particular, I demonstrate that zero topic plays a crucial role in capturing the distribution of discourse/inter-sentential anaphora of null arguments in Japanese. Further, considering the mechanism of how zero topic is introduced into a structure, I defend Hasegawa’s (1984/5) idea that zero topic is nothing but a special case of null operator which happens to move to the front of the entire sentence. I then consider those cases in which such a null operator takes its antecedent intra-sententially, examining its properties regarding locality.

(3) 言語学講演会・ワークショップシリーズ

11月25日(木)、11月26日(金)：北海道大学

11月29日(月)：東北大学

共催：北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院研究院
東北大学大学院文学研究科英語学研究室

1. 特別講義

日時：2010年11月25日(木)、13:00-14:30

会場：北海道大学メディアコミュニケーション研究院(旧言語文化部)棟6階スタジオ付き講堂

講演者：Cedric Boeckx氏(バルセロナ大学)

演題：Moving beyond explanatory adequacy

2. ワークショップ：「日本語モダリティと関連現象」

日時：2010年11月25日(木)、15:00-17:00

会場：北海道大学メディアコミュニケーション研究院(旧言語文化部)棟6階スタジオ付き講堂

コメンテーター：

益岡 隆志 氏 (神戸市外国語大学)、遠藤 喜雄 氏 (神田外語大学)

発表者：

- ・ 林 恒立 氏 (北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程)

「評価を表す副詞「ただでさえ」について—モダリティとの関係から」

- ・ 田中 里実 氏 (北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程)

「発話類型のモデルと文末表現」

- ・ 大関 洋平 氏 (北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院修士課程)

「真偽判断モダリティと推論のスコープ」

- ・ 遠藤 喜雄 氏 (神田外語大学)

「フォーカスのカートグラフィー」

3. 講演会

日時：2010年11月25日(木)、18:15-19:45

会場：北海道大学メディアコミュニケーション研究院 (旧言語文化部) 棟6階スタジオ付き講堂

講演者：益岡 隆志 氏 (神戸市外国語大学)

演題：名詞修飾節と文の意味的階層構造

4. Workshop: New Perspectives of Generative Grammar

日時：2010年11月26日(金)、9:00-10:30

会場：北海道大学メディアコミュニケーション研究院 (旧言語文化部) 棟6階スタジオ付き講堂

コメンテーター：

Cedric Boeckx 氏 (バルセロナ大学)、遠藤 喜雄 氏 (神田外語大学)

発表者：

- ・ 川原 功司 氏 (藤女子大学)

Antecedent Contained Deletion and Non-Argumental

Gaps

- ・大関 洋平 氏（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院修士課程 1 年）

Metalinguistic negation as negation in split CP

- ・三好 暢博 氏（旭川医科大学） & 戸澤 隆広 氏（北見工業大学）

Feature inheritance and EPP satisfaction

5. 連続講演会：Cartographic Approaches to Generative Syntax

日時：2010 年 11 月 26 日（金）、18:15-21:00

会場：北海道大学メディアコミュニケーション研究院（旧言語文化部）棟 6 階スタジオ付き講堂

講演者と演題：

- ・遠藤 喜雄 氏（神田外語大学）

The cartography of non-root sentences

- ・Guglielmo Cinque 氏（ベニス大学）

Word order typology: The syntax of DPs, with particular reference to adjectives

- ・Cedric Boeckx 氏（バルセロナ大学）

Cartography and other current linguistic practices in the context of cognitive science and biolinguistics

6. ワークショップ：「ミニマリズムとカートグラフィーのインターフェイス」

日時：2010 年 11 月 29 日（月）、9:30-16:30

会場：東北大学文学研究科研究棟 2 階（川内南キャンパス）
大会議室（219 室）

コメンテーター：Cedric Boeckx 氏（バルセロナ大学）、
Guglielmo Cinque 氏（ベニス大学）、遠藤 喜雄 氏（神田外語大学）

発表者：

- 江本 博昭 氏（東北大学大学院文学研究科専門研究員）
Transfer domains
- 北田 伸一 氏（東北大学大学院文学研究科後期課程）
Passive as a consequence of feature inheritance
- 中村 太一 氏（東北大学大学院文学研究科専門研究員）
Feature inheritance and phase-driven head movement
- 大倉 直子 氏（神田外語大学言語科学研究センター非常勤研究員）
Passivization in ditransitives and honorifics
- Cornelia D. Lupsa 氏（岩手県立大学）
Romanian sentence adverbs and root complementizers
- 西山 國雄 氏（茨城大学）・小川 芳樹 氏（東北大学）
Auxiliation, atransitivity, and transitivity harmony in Japanese V-V compounds
- Cedric Boeckx 氏（バルセロナ大学）
Minimalism vs. minimalism: The notion of ‘phase’ as a case study
- Guglielmo Cinque 氏（ベニス大学）
Toward a unified analysis of relative clauses